

興教大師の講式

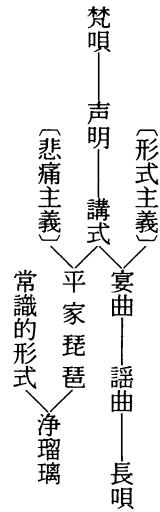
布 施 淨 慧

一、講式とは

講式は声明の中でも所謂「語る声明」の代表的な曲で、特定の尊・經・真言・思想・神祇・祖師等の利益や功德或は靈徳など、散文にて作られたものに、一定の旋律を付し、式師と呼ばれる僧によって唱えられる。これを聴聞する側は、思想・教説を理解し、信仰を一層倍加することとなる。梵漢の經文に旋律を付けた声明とは違い、平易に綴られた和文を主体とした講式は、日本に發達した仏教音楽、或は仏教教化の新しいメディアとして重要な機能を有したのである。

一方、邦楽史の上からいうと、金田一春彦博士の研究に従えば奈良時代に移入された梵唄が日本式仏教音楽となり、それは形式的に整えられた楽曲であった。これが鎌倉時代になると形式を脱して、内容主義のものとなり、歌詠的というより朗誦的なものとなり、これが講式というものの誕生へと進んだ。仏教界において法会や教化の為に盛んに用いられていた講式は、俗界に入って、関東に根付いたものは平家琵琶となり、京都の風土に養われたものが宴曲となり、やがて謡曲へと変わっていった。邦楽学者田辺尚雄氏の説によれば、その系譜は次のとおりとなる

と云う。



この図式による限り、講式の音楽的意味はわが国の邦楽に対して多大の影響を与えたものと位置づけられ、「講式はまさに現代諸邦楽の父ともいふべきものである」と評価されているのである。『日本音楽講話』田辺尚雄一七五)

講式は大体何時頃から行われていたかについては、鎌倉時代に出た永観律師(一一一年没)七十九才とする説が紹介されている。律師の「往生講式」は大正蔵經に収録される程の整理された格式と名文をもつてなる講式である。しかもこれ以降に成立した講式は、この「往生講式」を模範とし、旋律・形式はすべてこれに則って作られたといわれている。

『大正蔵經』八十四卷には、この永観の「往生講式」の他、講式と名づけられたものが五本収められている。この最初に収録されているものは伝教大師御作とされる「薬師如来講式」である。伝教大師最澄は弘仁十三年(八二二)五十六歳にて入寂されている。「薬師如来講式」が成立した年次については不明であるが、このことは永観以前に既に講式は行われていたことになる。この事実に従えば、講式は九世紀前半には既に天台宗に起こり、これが教化の形式として効果的であったことにより、浄土門においても、真言宗においても流布されるようになったと見

るべきであろう。

講式

本来「講」とは、「とく」という義であり、つげる、はなす、かたりとく、ときあかす、明らかにするなどの用きを示す語である。これに付随する「式」は、「のり」を第一義とし法と同義である。ここには規格や様、制などという概念が生ずるが、この二字の指し示すところは、「ときあかす法」であり、教義・思想の平易に解釈する形式として案立されたものである。

その形式は、一般的には、語り始めの部分には、例えば「慎み敬って一代教主釈迦如来に白して言さく」という句が置かれ、この講式の目的と以後展開される内容が、何段かに分けて述べられるものであるという「表白」がある。次に三段とか、大きく七段とかに文段が整理され、功德や利益などが対句や美麗句を用いて述べられ、各段の終りには「伽陀を行すべし」と唱えて、七言等にまとめられた偈文を出し、これを結びとし讃詠するのが様式である。

註

(1) 金田一春彦先生の『四座講式の研究』には、講式目録として百七にのぼる講式を表にしているが、この中に興教大師のものが十編上げられている。(二)の不動秘式の名目な

し)。これは解脱上人作となっているもの十三編に次ぐもので、興教大師作のものが如何に伝えられ現存しているかを示すものである。

二、興教大師の講式

『興教大師全集』第八巻中に収められる大師撰述とされる講式は次の如くである。

興教大師の講式

一、文殊五十万遍講式並法則	一段	一卷
二、不動講秘式	三段	一卷
三、不動講式	三段	一卷
四、愛染王講式	三段	一卷
五、愛染明王講式	一段	一卷
六、多聞天講式	五段	一卷
七、歡喜天講式	五段	一卷
八、舍利供養式	五段	一卷
九、日率都婆式	一段	一卷
十、地藏講式	一段	一卷
十一、弘法大師講式	一段	一卷(一)

右は全て漢文体で書かれたものであるが、宮坂宥勝先生編注の『興教大師撰述集』下巻には右の訓下しされたものが収められ、読誦するに至便なものである。しかし、これを声明として如何に読誦すべきかは、『全集』及び『撰集』本にては不明である。本宗に残され現に行われている『舍利講式』が、明恵上人時代の遺風を伝えているとするならば、興教大師の講式もまた同様の譜子づけをされていたものかとも思われるが、博士の付せられた講式本が管見するに至らぬ以上、このことは不明といわざるを得ない。

前掲の十一の講式の本尊は、文殊菩薩、地藏菩薩、不動明王、愛染明王、多聞天、歡喜天、舍利、卒塔婆、弘法大師である。小論にて取り上げる資料は、『興大全』と『選述集』に収められたものによるから、以上の本尊の名

目を知ることとなる。しかし、散逸したのも或は未発表のものもあると見なせば、この講式の本数も、本尊名も増えるものであろう。例えば、「菩提心講式」なるものも、かつて存していたようで、覚鑿上人作として数本の目録に記載されている。

また、頼瑜(一二二六)の『真俗雜記問答鈔』第十八、六十五の「不動劍印」條下に、

不動講式(密嚴院の作か)にいわく。

教令輪の所居は衆生三角の火輪。無量寿智印は我等八瓣の肉団なり。云々⁽³⁾

なる文があつて、覚鑿の撰述か否かを疑っているものの、「不動講式」の文が引かれている。現存の二種の「不動講式」に、引證の文は見当たらない。ということは、頼瑜の時代に他の「不動講式」があつたか、或は頼瑜の疑うように、この講式は覚鑿以外の人の撰になるものであつたか、ということである。頼瑜は『薄草子口決』第十三、不動の中でも、「又、彼の師のいわく。として同文を挙げ、その下に、「いまだ正文を検せず」と細註を施している。頼瑜自身も「不動講式」の文にまで立ち入っていなかったことを示したもので、この不動講式は覚鑿撰とは決擇がつかないことになる。しかし、覚鑿撰とする可能性は残るわけで、現存のもの以外に数本の講式があつても不思議はないと思われる。

次に、『醍醐寺聖教并記録目録』中には、多聞天講式と地藏講式の名と共に、「摩訶迦羅天講式」一卷が記載され、表題に「摩訶迦羅天講式」とあり、奥書には「寛政四年(一七九二)壬子十一月甲子写得し訖んぬ。求法小僧見深とある。この記載によれば、江戸時代に至るまで、大黒天講式が醍醐寺にあったことになる。

これら講式は、いつ製作され、どこで行われたか。講式には、法会に際しての表白文のように、年月日は書かれ

ていない。したがって、覺鑿上人四十九歳の生涯の中で、これら多数の講式の成立年代の考証は無理である。

ただし、たった一点のみ、成立年代を類推した記録がある。櫛田良洪博士著の『覺鑿の研究』の巻末に付せられている「関係略年表」中においてである。即ち元永元年(一一八〇)の条に、

○この年、地藏講式を撰すと伝う(地藏講式頭秘鈔)

とある。覺鑿上人二十四歳の時に当たり、高野山上に入住して四年目である。この年次を策定させる『地藏菩薩講式頭秘鈔』は、『興教大師伝記史料全集』第二編史料第三類学芸中に、序文と末文が拾われている。この鈔は元禄十年薩州沙門一雨が注解したものである。本分は『全集』には略してあるが、末尾に、

此書撰号藉(旧名)問、此講式撰述何時日乎。答、已此式者、附(諸秘積中)想夫徒(一一八六)永久四年丙申(一一八六)至三元永元年戊戌、中間撰述、相伝上人二十四才、自丙申至戊戌八月、修(求聞持法)者凡八度、茲年立(八大願)、其第八願云、可(下)励勤随堪撰(集真言宗章疏)、統(密教壽命)開(行者心眼)個中撰集章疏之願、聿(獲)成就(也)、尊者所撰述之諸秘積義章等行(三千世)凡八十餘種、千古藉(之為)龜鏡(也)

なる「覺鑿上人撰述」と題する一文によってである。立願八大願の文をもって拠り所とする旨であるが、余りにも網にかけすぎ、「地藏講式」という個の制作年代の決定にまでは無理があるように思われる。

その他のものは全て今後の研究に委ねねばならない。推測ではあるが、上人が新たに各尊像を造願され、その度に供養の講演を催されたとも考えられるが如何であろうか。

上人によって作られた講式は、書写を重ねて今に伝えられるのは有難いことである。しかし、これが法会として行われていないことは残念である。上人の講式は少なくとも江戸初期に至る迄、行われていた形跡がある。今その

唯一行われていたと思われる「舍利供養式」について、その周辺の問題をも含めて検じてみたいと思う。

『史料全集』には、「東寺金剛藏所藏」として、「舍利講式」を伝える旨の記録を記載している。その本には、右自行の為、鑲上人五段式、内要段これを抄し畢んぬ。

(一三五七)
延文二年正月六日

権少僧都 泉宝^{生年}
五十二

とある。

又、その他、永正十二年乙亥閏二月十五日法印権大僧都真海六十二の書写本、^(一六七五)延宝三年杲快書写一軸ありと記してある。⁽⁸⁾

現在『興大全』所収のものは、大覚寺所藏本を底本とし、対校するに東寺観智院所藏の康安元年の古写本をもつてしたとある。⁽⁹⁾この本の最尾に頌が掲げられてある。それは「我等所修諸功德 廻向不二如法界 十方無辺衆生界、皆共速證大菩提 南無自他法界共成仏道」であり三遍唱えるようになってゐる。長谷寺に伝えられる本も末尾が同頌文である。従つて同本の写本であるが、この長谷本の由来は、^(一五五六)弘治二年九月十六日に、亮昌大法師に与えられた旨の奥がある。⁽¹⁰⁾

舍利講式の註解書

三宝院には、『^(一六二)舎利講式聞書』三帖があること『史料全集』に記してある。これによると元々この『聞書』上中下三帖は、楨尾の自性上人我宝^(一三二七寂)の作である。⁽¹¹⁾たまたま見るに及んだので写し留めた旨が、座主准三宮義演の名が、^(一六二)慶長十六年の年号と共に記してある。⁽¹²⁾写本の原本は、醍醐山理性院五智院の二巻本である旨、奥書によつて知れる。

舍利講式の勤修

頼瑜の『秘鈔問答』十三本に、駄都に関する秘訣が述べられているが、その中に、

如宝本尊加持には五部の塔印（内五鈷）を用う。此等の意は、卍字は五輪にして、大日如来の種子、三形なり。五部印、卒都婆印、俱に大日の印也。此等の意は法身舎利の義なり。密厳院にては、毎月二十八日大日の縁日に舎利講を行す。これらの深意、この意を示すなり。⁽¹³⁾

と述べ、密厳院における舎利講式の行われる日を、毎月二十八日とした旧規を示している。このことは、上人の講式が実際に行われていた事実を示す、極めて少ない記述だけに注目されるのである。

下って、十五世紀中半から十七世紀初頭にかけて、醍醐一山では、盛んに舎利講を勤め、その記録は『満濟准后日記』や『義演准后日記』に散見することができる。勤修の目的は、声明始という儀に添って修されるのが、⁽¹⁴⁾
応永三十四年正月一日の条下にあり、以後正月一日に修される事例の多いところは、この声明始が行われ続けているものであろう。或は彼岸にこれが行われていたことが知れるのである。

註

(1) 『興教大師全集』下の九講式和讃部には、この他

文殊五十万遍表白 一卷

梵字尊勝陀羅尼安置清涼山真容院記 一卷

舎利秘密和讃 一卷

の三本が収められている。いずれも講式の形式でないの
で、今は外した。

(2)

		1	2	3	4	5	6	7	8	9
	書籍目録	伝法院本願製作目録	深嵐拾葉集	東寺金剛藏聖教目録	諸製作目録	醍醐寺聖教	諸師製作目録	諸宗章疏録	伝法院方并広沢通用聖教目録	広益書籍目録大全
史料全集		一一二九	一一三二	一一三五	一一三九	一一四二	一一四八	一一五三	一一五九	一一六一
1	文殊五十万遍講式									
2	〃 表白		○		○		○	○		
3	不動講秘式 (3)						○	○		
4	不動講式 (3)						○	○		
5	愛染王講式 (3)						○	○		
6	愛染明王講式 (3)									
7	多聞天講式 (5)					○	○	○		
8	歡喜天講式 (5)							○		
9	舍利供養式 (1)						○			
10	舍利供養式 (5)	○	○		○		○	○		○
11	日卒都婆式							○	○	
12	弘法大師講式									
13	地藏講式					○	○	○		
	菩提心講式	○	○		○		○	○		
	摩訶迦羅天講式					○				

(3) 真全 〇三三四下

(4) 榎田良洪博士の『統真言密教成立過程の研究』の附録に、「覺鑲の新資料」として、金沢文庫所蔵の鎌倉期の古写本の資料の中に、

一、不動講式 上人 一卷

と書目があげられ、次いで

本書は奥書に「嘉慶三年^(二二八)己正月二十八日書了」とあって、覺鑲上人御製作附記されている。書写した僧は沙門朝春であるが、筆者は近世に近いようである。(図書、附録八七三頁)

と記述されている。

未見の故に判断はできないが、新資料であれば、この二本の外の不動講式となる。今後の実際の調査研究の必要がある。

(5) 正蔵 〇二五四 a

(6) 註4で述べた『統真言密教成立過程の研究』附録に、金沢文庫所蔵資料の中に、
一、摩訶迦羅天式 鑲上人作 一紙と報告され、

本文は室町期のものであるが、最初の二行の最下部がススケで磨滅して読めない。

しかし、「鑾上人作」と明記されているから、一応覺鑾上人作の意味にとって紹介しよう。と櫛田博士は述べて、次の式文を紹介している。

摩訶迦羅天式 鑾上人作

敬白三宝境界殊大黑天神大聖歡喜天吒枳尼弁財天女道祖遊行神等一切諸字賀神將言、

夫以第□四生間難值如來教難受人界生、伏惟尊大黑天□□地不動明王応跡堅牢地神变化也、出密蔽花蔽境示和光同塵形偏濁惡群類無福者只欲仰大黑天神利生皆是宿善催内、機縁至時也

然則修每日一座講演所祈旨趣者、為父母孝養奉仕師長興隆仏法界衆生也、此四種所願無私不垂哀愍納受給哉 凡忿此密号有六種得益而捧一筆一香七宝随意滿庫藏愍此天王曼荼羅聖衆、別以悉地圓滿本尊也 加之金剛壽命經中自食上分供養大黑天神日月增加千万億物食云々 明知 耀威光於一天施利益八挺誓願有憑印 必加益響一切諸法無不生從縁方行一善無不依修行 仰願大黑天神四部大將諸大眷屬等哀愍弟子円誠二世悉地令成就 仍唱加陀可行礼拝

南無帰命頂礼大黑天神 自他法界平等益三遍

願以此功德 普及於一切
我等与衆生 皆共成仏道

(同書 附録八七一頁)

右の文が、前表5の醍醐寺聖教に記載されていたものと同

様であるか否かはこれまた今後の研究課題である。

(7) 『史料全集』二二二四

(8) 『史料全集』二二二五

(9) 『興大全』二二九一

(10) 『史料全集』二二二六

(11) 『仏書解説辞典』には、「舍利供養式鈔」二巻として収録してある。

(12) 三宝山所蔵の『舍利講式聞書』は、三帖あって、上・中巻に慶長十六年の奥書があるが、下巻の奥は次の如きものである。
(二四八)

于レ時長享二年戊申卯月下幹候、一部之写功畢、式覺鑾上人製作、三帖抄楨尾平等心院自性上人口訣也。依ニ後宇多院御信仰ニ而此抄事任ニ勅問ニ被レ書ニ進之ニ云々。仍只今醍醐寺理性院五智院之本末之抄書写畢。料紙左道也。早々可清書者也。
(二六一)

慶長十六年辛酉 日書了

貧道沙門宜誓判

座主 義 演

これによってこの抄の来由を知るのである。

(13) 大正蔵⑨五一八 a

(14)

慶長7 (一六〇二)	二月二日	彼岸入	舍利講 演照僧都導師	〃	〃
	八月六日	彼岸入	舍利講式 亮淳權僧正導師	義演日記	
	五日		理趣三昧舍利講 導師演照、 伽陀演賀 七日同じ		
	三日		舍利講 導師演照、 伽陀演俊 アサリ		
	三月二日		護摩兩座 舍利講式、 演照僧 都、 伽陀甚盛アサリ		
慶長4 (一五九九)	正月一日		舍利講 二日同じ		
	十九日		式 予(義演)	〃	
	十八日		舍利講 式解脱	〃	
	十七日	彼岸中日	伽陀演賀律師	〃	
	八月十四日	彼岸入	式 (義演) 伽陀演俊アサリ	〃	
慶長2 (一五九七)	正月一日		舍利講	〃	
	八月七日	彼岸中日	舍利講	義演日記	
	八月五日		演俊講摩	右同	
	正月一日		舍利講 堯嚴法師、 演賀伽陀、 舍利講	義演日記	
永享4 (一四三三)	二月十五日	彼岸	舍利講式 供養法金剛界 (春季金界也)	右同	
文祿5 (一五九六)	正月一日				
応永34 (一四三七)	正月一日	書明始	駄都讚(宝菩提讚) 地藏講・舍利講	日記	滿濟准后
年	月日	目的	記録	出典	

三、興教大師の講式の特質

興教大師ご在世中、現流している講式を含めて、数多くの講式が勤仕されたのであるが、或は高野山上において、或は根来山においての諸尊を本尊とする堂宇で行われたものであろう。また次第も、例えば「多聞天講式」によれば、総礼、三礼、法用、表白（内容五段）、神分、祈願、六種供養、廻向といった順で行われたので、この形式は他の講式にも通ずることであろう。総礼といい、法用或は伽陀を唱える内容からいえば、この法会に多くの僧達が勤仕していたのである。その大衆は、

そもそも今、この講会一結衆は、皆、仏室に入って五瓶の水を沐し、ともに壇場に臨んで三密の薬を投ぐ。

と「愛染王講式」に上人自らが記述しているように、密門の修行僧であり、上人の下にいた諸弟子達であったのである。そこで、今諸講式全てを通読してみると、上人はこれら弟子達にも向けて、教理においても、教誡するについても、上人自身の信仰、哲学についても、講式という文体をもって、自ら述べられていたものと思われるのである。それらを思わせる個所はそこここにある。

教理については、全講式にわたって述べられるので、各講式の初段を中心に巧みに記述されるところである。教誡については、上人自らへの言葉とも思われる、

仏道を修習せんこと、今まさにこの時なり。すでに得道の近きことを知んぬ。実に精がいそずんばあるべからず。
(舍利供養式)⁽²⁾

をはじめとして、厳しく求法の本精神の昂揚を述べている。諸弟子に対しては、

なかならずく弟子、発心せずして形を出家に改め、修行せずして名を仏子に仮る。十重、十善の戒、護持全く闕

け、近住、勤策の律名なほ虚し。日々夜々に罪障を積んで無懺無愧なり。念々歩々に悪行を造って人を謗し法を謗す。誠に破戒比丘の形、還って仏教を破し、汗行沙門の名忝く正法を汚す。いかにいはんや虚受信施の罪、報いを奈落の塗炭に招き、不浄説法の咎、果を悪趣の苦器に引く。およそ自作教他の悪、過去現在の罪、今、三宝護法の前に対して、発露懺悔の誠を致す。(多聞天講式)⁽³⁾

と述べ、猛省をうながす姿勢は、かの「密嚴発露懺悔文」と軌を一にしてすさまじいものがある。

大師の信仰哲学は、しばしば浄土教的と評価される。那須政隆博士は、「密教的な浄土信仰の解釈」とこれを位置づけられているが、蓋し当を得た評価として今でも敬服している。確かに、講式の文章上においても、浄土、往生、正念、引摂という浄土教的な字句が散在していたり、「念仏の功疎かなれば、来迎の聖衆いまさず」(不動講式)という文章を皮相的にみれば、正に浄土信仰に身を移したが如き解釈もできよう。しかし、浄土でしきりにいう極楽の見解にしても、「舍利供養式」の中に、いみじくも上人は次の如く述べている。

そもそもこの土は、もう浅略につかば他受応化の淨刹、もし深秘によらば自性法身の仏土なり。故に大師のいわく。

「この華藏世界は最上の妙楽、その中にあるが故に、極楽という。まさに知るべし。極楽と華藏と名異なりといえども異処にあらず」

然ればすなわち名を西方に仮って実は法界に遍ぜり。願を発して生ぜん⁽⁵⁾と欲はばこの心彼の刹なり。九品の蓮台はすなわち性徳の心蓮に開け、無量の莊嚴はすなわち恒沙の己有に顕さん。(舍利供養式)

西方極楽は、浅略にいえば阿弥陀仏の浄土であり、深秘に約せば、法身大日如来自性法身の華藏世界であると明言している。この論拠は、文中のとおり、宗祖弘法大師の提撕として、『秘蔵記』⁽⁶⁾の文を示しているのである。こ

ここにも上人の宗祖大師教学の贊仰の姿勢を窺うことができるのである。そして上人の極楽や往生といわれる基本的態度が決して浄土信仰でいうものと異なることを知るのである。こゝうした意味で、「舍利供養式」の第二に、舍利を供養して極楽に生ぜん⁽⁷⁾と願う段に、

この功德をもって極楽に廻向し、必ず往生の素懷を遂げ、速やかに普賢の行願を満ぜん。能仁、弥陀、仏体異なることなし。菩提、涅槃、果徳、これに同じ。

なる文は上人の極楽浄土思想の帰結を表したものと見ることが出来る。

次に講式を行じて祈願する中に、上人は臨終の大事を得るために、各尊の加護をしきりに願っていることが注目される。その箇所を指摘しておきたい。

不動明王

「不動講秘式」には「祈るところは最後の正念、仰ぐところは明王の威力なり。臨終に魔縁を退け、最後に引接を垂れたまへ」と表白段で述べ、第二段に特に臨終正念を祈る段を設けて、次の如く述べている。

五濁濫漫の世には魔縁禁じがたく、三障鹿動の身には道心退き易し。ゆえに魔縁障を成せば最後の正念乱れ易く、道心熱せざれば、浄土の業因、植えがたし。これをもつてもし明王の本誓を仰がずんば、最後の我等いかんが最後の魔障を退けん。もし大聖の威勢に憑らすんば、底下の異生何ぞ往生の本意を遂げん。下略。(不動講秘式)

多聞天

仏法護持をもつてなるこの多聞天は、末法の仏教信者を守り、神呪を説いて薄福の衆生を救う尊である。上人はこの講式を修す目的は、三世の大願を祈り、かつ身後の菩提を成せんことにあると陳べている。講式を五段に分つ

ているが、最後の五段目に「浄土を願求して一切に廻向す」と題し

そもそも無上菩提の果を求むる者は、先づ浄土不退の果報を欣樂すべし。これ諸仏の善功、菩薩の方便なり。この故に弟子等、弥陀の願に乗じて九品の蓮台に生ぜんと欲ふ。

仰ぎ願はくは三宝護法多聞天王、命終の時に臨んで、いよいよ擁護の誓ひを励まし、内外の障難を壊つて極樂界に引導したまへ。いかにいはんや天王の誓願に曰く、「所生の処を得ることは汝が所願に随ふべし」と云々⁽¹⁰⁾。

(多聞天講式)

このように述べ、必ず天王の誓願を得て往生を信じ、その相そのままが護持仏法となり、かつ多聞天の福智円満を行者に及ぼさんとする願求も成ずるであらうと見解を述べている。

歡喜天

歡喜天二尊は男天は大自在天の所変、女天は觀自在尊の応化として、折伏撰取の義用を現じ、拔苦与樂の功驗を有している天尊である。上人は歡喜天の誓願の殊勝なる相を説き、五段よりなる当式の第四段目に「利益の無辺を迎ぐ」として、歡喜天は、

始め密嚴華藏の土より終に分段同居の郷に暨るまで、塵刹微塵刹々として至らざるところなし。沙界恒沙界々として現ぜざるところなし。上、碧落に遊び、下、黄泉に入り、世々番々の利益、時として止むことなく、各々面々の願望事として空しからず。中に就いて一生限りあつて百念遂に窮る。最後の時、臨終の尅には、男天は無数の眷属を率いて四魔の群党を破り、女天は百宝の華台を挙げて九品の淨刹に迎ふ。利、現当を兼ね、益、真俗に被る者かな。⁽¹¹⁾

と歡喜天一尊に臨終時の利益をたのんで、極樂往生を願っているのである。

舍利

釈尊は化縁つくして滅度を示したが、大悲休まずに舍利を留めて利益を今に施している。上人は「たまたま帰依を致せば、必ず三有の海を渡り、纔に供養を興せば定んで四徳の峯に登る。」と舍利を信仰し、仏道を修習することを薦めている。その仏道の修習の内容は密教の修習であり、摩尼供養を儲けて舍利に献ずることである。この修習を行すれば、「往生極楽の勝行、頓証菩提の妙因、何事かこれにしかん⁽¹²⁾」と舍利供養の重要さを述べている。更に、上人はこの必要性を強調するに、

金剛の弟子等、前身、いかなる善苗を植えしか、今世にこの福田に遇い奉る。静かにこの理を思えば感涙、袖を潤す。身命を捨て珍財を投げても誠にもっとも競い供養すべし。⁽¹³⁾

と述べているが、誠にこれ上人の真実の吐露を聞くが如く感銘深いものである。

この他、真言読誦の功德（文殊五十万遍講式）、命息の哲学（愛染王講式）、阿字観（多聞天講式）、塔婆の功德（日卒都婆式）など重要な問題があるが、これは他日に譲りたい。

講式は本尊の本誓を讃歎し礼敬することが行者の最も大切な行の目的である。ひたすらに諸尊の本誓を信じ、これに帰依していく信仰が、上人の宗教的信条を、これら講式においてもあますところなく展開していることを知るのである。

註

(1) 「愛染王講式」『撰集』下巻一二頁

(2) 「舍利供養式」『撰集』下巻四一頁

(3) 「多聞天講式」『撰集』下巻二二頁

(4) 「不動講秘式」『撰集』下巻九頁、この後に、「禪定の力

少なければ、三昧現前すべからず」とある。

- (5) 「舍利供養式」 『撰集』下卷四三頁
- (6) 「秘藏記」(弘大全②三〇頁) 引用の文は「華藏世界の義」中のもので、これより前に「華とは理なり。理は法界に遍じて諸法をその中に蔵む。故に華藏という。」なる文がある。
- (7) 「撰集」四三頁
- (8) 「不動講秘式」 『撰集』下卷八頁
- (9) 「不動講秘式」 『撰集』下卷九頁
- (10) 「多聞天講式」 『撰集』下卷二五頁
- (11) 「歡喜天講式」 『撰集』下卷三〇頁
- (12) 「舍利供養式」 『撰集』四〇頁
- (13) 「舍利供養式」 『撰集』四三頁